

講義①

「美術館と公共図書館、学校図書館の連携～松川村のMLA連携実践例から～」

講師：安曇野ちひろ美術館副館長

竹迫 祐子

講師：松川村図書館館長

棟田 聖子

講師：安曇野ちひろ美術館学芸員

松方 路子

1 松川村に図書館をつくる

平成初期までの松川村の公民館図書室は、公民館の2階の会議室に毎年なにか全集を1セット買って設置するようなものだった。平成5年からロビーに少し本を置いて、貸出も始めるようになったが貸出手続きは利用者が貸出カードに書き込み代本板を使っていた。その後、空き施設に場所を移し県立図書館公民館文庫を利用させていただき、2万冊を超える蔵書量となった。職員も常駐し代本板の使用は中止したものの、閲覧スペースなどは十分ではなく、入口でスリッパに履き替え2階に上るのも利用しやすいとはいえなかった。

村は平成の大合併の際自立の道をえらび、借金をしない方針で行政を行っていたが、積立金もたまり、念願の新公民館を建てることとなった。村民に取ったアンケートから、新公民館の機能として図書館とホールを備えることとなり、村の総合計画にも載せられた。さらに、「みんなで作る」ことにこだわり、30回以上のワークショップを行い、それぞれの機能ごとに班を作り細部まで話し合っ



(講義中の棟田講師)

図書館班では図書館の理念を何度も話し合うことから始め、村の文化の中心としてゆっくり過ごせる居心地のよさを大切にするにしました。家具屋をまわったり、ダンボールで等身代の模型を作りスペースをイメージしたりして滞在型の図書館構築を目指した。小・中・公民館の司書3人が関わっていたこともあり、ちひろ美術館がある松川村として、小中学校の子どもたちに資する図書館、職員の顔の見える図書館に向けて選書にも夜な夜な取り組む日々が続き、平成21年のオープンに至った。

学校との関係が人を通して築かれていたので、オープン時に図書館バッグを中学生のデザインで作成し配ったり、学校図書館の企画を公共でもリレーしたりしている。一村一校であることも活動をしていく上でやりやすさを生みだしている。

2 美術館との関わり

竹迫副館長には公民館図書室時代にお話会に来ていただいていたりして、図書館誕生以前から人間的に関わってもらってきた。美術館からの呼びかけで村にたくさんの児童書を寄付していただいた。それがご縁で、今でも児童文学の研究者の方から本の寄贈を頂いている。

美術館のその時々



(講義中の松方講師)

3 美術館と松川村

ちひろ美術館は、0歳から100歳まで人にとって絵本は必要だと考えている。そこで村にブックスタートを提案し、同意を得られたため2001年から4カ月検診時に絵本のプレゼントを始めた。

日々の運営の中でも、月2回のお話会は棟田館長と一緒にやっている。ギャラリートークからお話会、ワークショップとお話会など美術館であることを活かし、時間帯も朝から夜まで様々なセッティングで行ってきている。中学生の図書委員会が夏休みの間ボランティアで読み聞かせやワークショップの手伝いをする活動も10年以上続いている。

美術館の外でも、学校に行き読み聞かせやワークショップを行ったりしている。小学生の美術の時間にちひろのじみの技法を使って絵本を作り、作品を公共図書館で飾ったりした。また小中学校図書館にはいわさきちひろコーナーを作ってもらっている。

展示に連動させて各国の絵本を母国語で読む企画を催し、近隣在住のいろいろな国の人にお話しお話会で国の様子なども話してもらったり、松川村と共同企画として、すずの音ホール（松川村図書館）前の芝生でスズキコージさんのライブペインティングをしたりしている。また企画展で松川村を訪れた韓国の絵本作家のパク・チョルミンさんが学生を連れて毎年村に来るようになったことがきっかけで、民泊を村で取り組みはじめている。村議会がちひろ美術館の誘致を満場一致で可決したときから変わらぬ、美術館を受入れともに暮らしていく姿勢に、美術館も応えていきたいと思っている。

4 これからの連携

松川村も美術館からのアプローチを受けて村としてセカンドブックを2015年4月に3歳児に対して始めた。そして美術館と図書館で、未来に向けてサードブックをお話の本のプレゼントとして実現したい。

村営の安曇野ちひろ公園を拡充整備し、トモエ学園の電車の教室を再現したトットちゃんの広場の建設を行っている。この電車の教室の整備には地元池田工業高校の「池工おたすけ隊」の力が注がれ、高校には電車内に設置する机や椅子の制作を年間のカリキュラム

に入れてもらった。また池田工業高校の校長のご尽力で近隣の廃校になった小学校の備品をいただけるか声をかけていただいたことから、電車の教室の備品の調達のみならずその地域の小学生との交流にまで発展している。

やりたいことがはっきりしていて、やりたいことが共有できることであれば、連携をあまり意識せずともつながっていくことができる。それぞれのやりたいことをつなげていくことが美術館や図書館の役割である。

絵本が0歳から100歳を超えたいかなる人も楽しめる文化財であるように、お互いを知り合い、違う文化が素晴らしいものだと思う合うことができ、すべてのおおもとである今日より明日、明日より100年後が生き延びて幸せなよりよい生活を目指す思いが一緒であれば、どこでも連携していける。範囲や規模は無量大である。



(講義中の竹迫講師)